


第1章

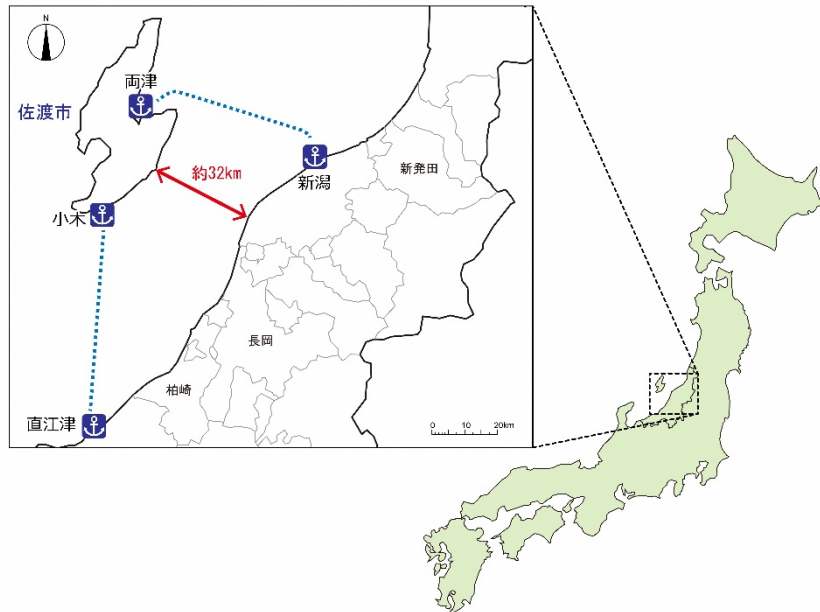


佐渡市の歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

本市は、本州、北海道、九州、四国を除くと、沖縄本島に次ぐ大きさの島で、本州との最短距離約 32km の日本海上に位置し、両津港-新潟港（新潟市）、小木港-直江津港（上越市）の 2 つの航路で結ばれている。面積は約 855.7 km²、周囲の海岸線は 280.9 km を測る。



佐渡市の位置

(2) 地形

本市は北に大佐渡、南に小佐渡の 2 列の山地と、これに挟まれた国中平野の 3 つに分けられる。この国中平野の東に両津湾、西に真野湾の深くびれがあり、島全体が S の字型になっているのが特徴である。大佐渡山地は、島で最も高い金北山（標高 1,172m）をはじめ、高い山や深い谷で形成されており、海岸は断崖絶壁が多く、雄大で荒々しい地形となっている。一方小佐渡山地は、低い山並みで形成されており、最も高い山は大地山（標高 645m）で、海岸は砂浜が多く穏やかな地形となっている。

島中央部を市内で最大の流域面積を誇る国府川こくふが流れ、この流域の開けた平野



佐渡市の地形図

部には国中平野が形成されている。また、河原田から真野に及ぶ真野湾沿いには、浜堤及び砂丘帯が発達している。その他、島南西部の羽茂川沿いにも小規模な平野が形成されている。

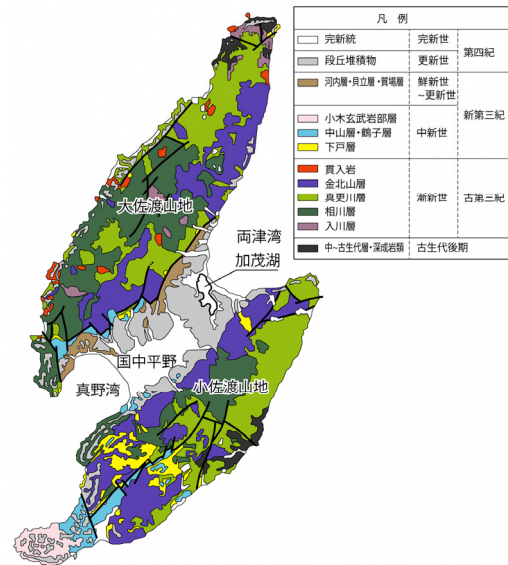
沿岸部では、島西部を中心に海岸段丘が発達している。



佐渡海府海岸

(3) 地質

本市で確認される最古の岩石は、今からおよそ 2～3 億年前の古生代後期のものであるが、地層の大部分は、火山活動によって形成された火山岩類及び日本海の海底で堆積した地層が重なったものである。このうち、相川金銀山が立地する大佐渡山地を構成する地質は、古第三紀・漸新世 (2,300 万年前) から新第三紀中新世初期 (1,800 万年前) に堆積したグリーンタフ (緑色凝灰岩) であり、その他の岩石として、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩がみられる。グリーンタフは、デイサイト (石英安山岩) や安山岩の溶岩類やそれらの火砕岩からなる火山噴出物を主体とし、下位から入川層、相川層、真更川層、金北山層の順に堆積しているが、これらをまとめて相川層群と呼んでいる。



佐渡市の地質図

日本海が誕生した約 1,700 万年前には、海浸期に伴う砂岩・礫岩・シルトを主体とする堆積岩からなる下戸層・鶴子層・中山層が形成され、これらの地層が隆起運動により変形しながら海上に現れ、佐渡が誕生したと考えられている。

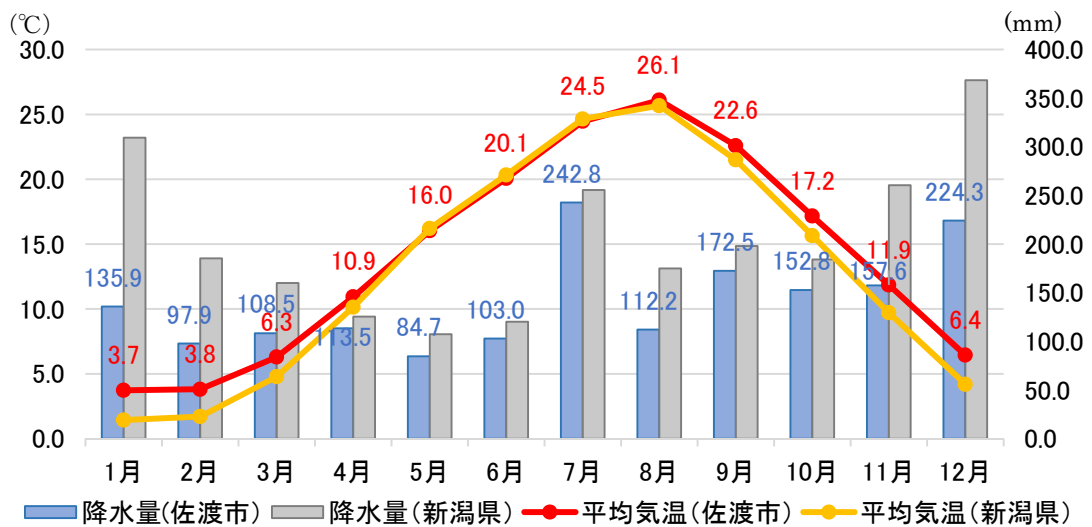
第四紀更新世中期 (約 12～78 万年前) 以降、隆起運動の活発化や氷期・間氷期の繰り返しによる海水面の上下運動などにより、山地や海岸段丘が形成され、現在とほぼ同じ島の形状となったのは、今から約 1 万年前の完新世とされている。

本市には、様々な鉱業資源を産出した多くの鉱山遺跡が分布しているが、金銀鉱床の多くは、火山活動の際に地下深く浸み込んだ雨水や海水がマグマの熱で加熱され、石英を中心として金や銀を含む熱水となって安山岩等の地層群を貫き、断層や岩石の割れ目に沈殿することにより形成された。そのため、佐渡では金や銀のみでなく銅の採掘も行われ、これまでに大小合わせて 50 ほどの鉱山が確認されている。

(4) 気象

本市の気候は、海洋性で四季の変化に富んでおり、夏は高温多湿であり、冬は日本海を北上する対馬暖流の影響を受けることから積雪は少ない。このため、暖かい小佐渡ではタブノキやスダジイなどの暖帯林やビワやミカンなどの栽培植物がみられ、反対に冬の季節風（北西風）が強く吹く大佐渡では、アカマツのような寒帯植物がみられる。

平成 21（2009）年～平成 30（2018）年までの 10 年間の平均値によれば、年平均気温は 14.2℃と新潟県平均に比べ温暖で、年平均降水量は 1,705.7mm と少なめである（県平均気温 13.0℃、県平均降水量 2,450.0mm）。



過去 10 年間（H21-H30）の平均気温及び降水量

資料：気象庁

過去 10 年間（H21-H30）の平均気温及び降水量

年	佐渡市（相川特別気象観測所）				新潟県（各観測所平均）	
	年間降水量 (mm)	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	年間降水量 (mm)	平均気温 (°C)
平成 21 年	1,561.5	14.0	31.0	-1.9	2,196.3	13.0
平成 22 年	1,819.5	14.5	34.9	-2.9	2,630.5	13.2
平成 23 年	1,613.0	13.9	35.5	-2.8	2,678.7	12.7
平成 24 年	1,872.5	14.0	34.7	-3.9	2,484.0	12.7
平成 25 年	2,102.5	14.0	32.7	-3.6	2,828.1	12.8
平成 26 年	1,867.5	13.8	33.8	-4.0	2,566.4	12.6
平成 27 年	1,235.0	14.4	36.9	-3.6	1,981.0	13.3
平成 28 年	1,530.5	14.6	35.9	-1.9	2,120.1	13.5
平成 29 年	1,762.5	14.0	34.6	-3.4	2,757.2	12.7
平成 30 年	1,692.0	14.4	37.8	-4.9	2,258.2	13.4
平均	1,705.7	14.2	34.8	-3.3	2,450.0	13.0

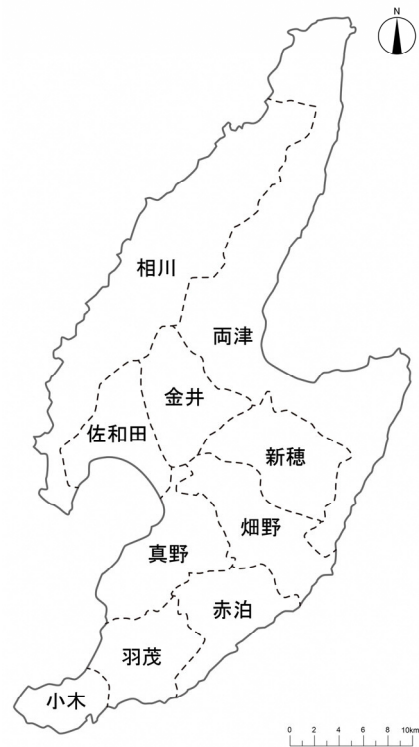
資料：気象庁

2. 社会的環境

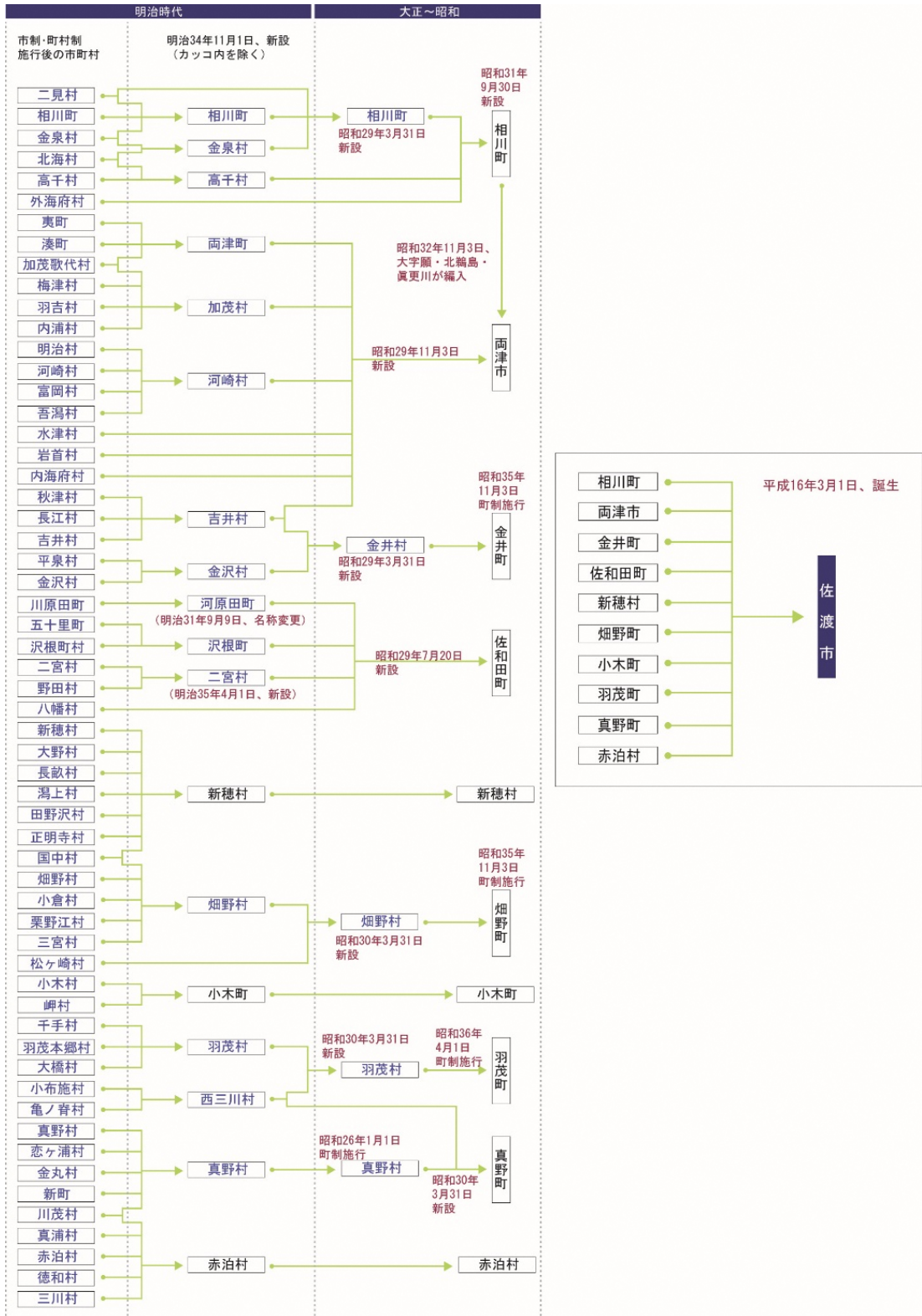
(1) 市域の変遷

現在の佐渡には、国中平野部・沿岸部・大佐渡丘陵部・小佐渡山中に 200 を超える集落や町内会が存在する。その原形は江戸時代に成立していた村であり、正保 2 (1645) 年には 251 か村、元禄年間 (1688～1704) には 260 か村、安政 4 (1857) 年には 262 か村が存在したと記録されている。かつての 2～3 か村が一つに統合された集落や、区画再編によって飛び地の多い土地境界を見直す集落などがあるものの、集落自体が消滅した例はあまりなく、400 年近くにわたる集落分布に大きな変化はみられない。

佐渡は、かつて^{さわた}雑太郡・^{ほもち}羽茂郡・加茂郡の 3 郡に分かれていたが、これは古代を起源とするものであり、明治維新ごろまで続いていた。明治時代には、町村制により 58 町村があったがその後、村々の統合が徐々に進み、昭和 36 (1961) 年、^{ほもち}羽茂町の町制施行により、^{ほもち}両津市・^{さわち}相川町・^{さわた}佐和田町・^{いんぎ}金井町・^{ほのの}畑野町・^{まの}真野町・^{ほもち}羽茂町・^{こぎ}小木町・^{にいぼ}新穂村・^{あかどまり}赤泊村の 1 市 7 町 2 村となり、平成 16 (2004) 年の 10 市町村合併を経て、現在の一島一市の佐渡市が誕生した。



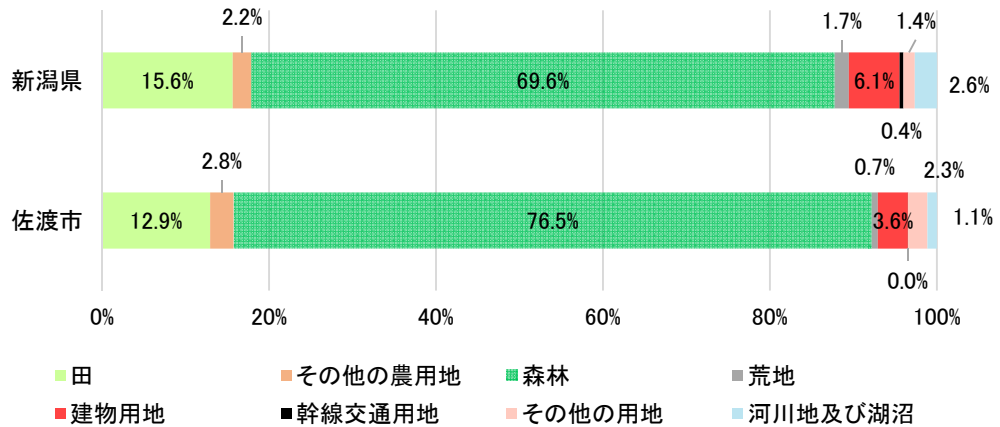
合併前の旧市町村の状況



佐渡市の市町村合併の変遷

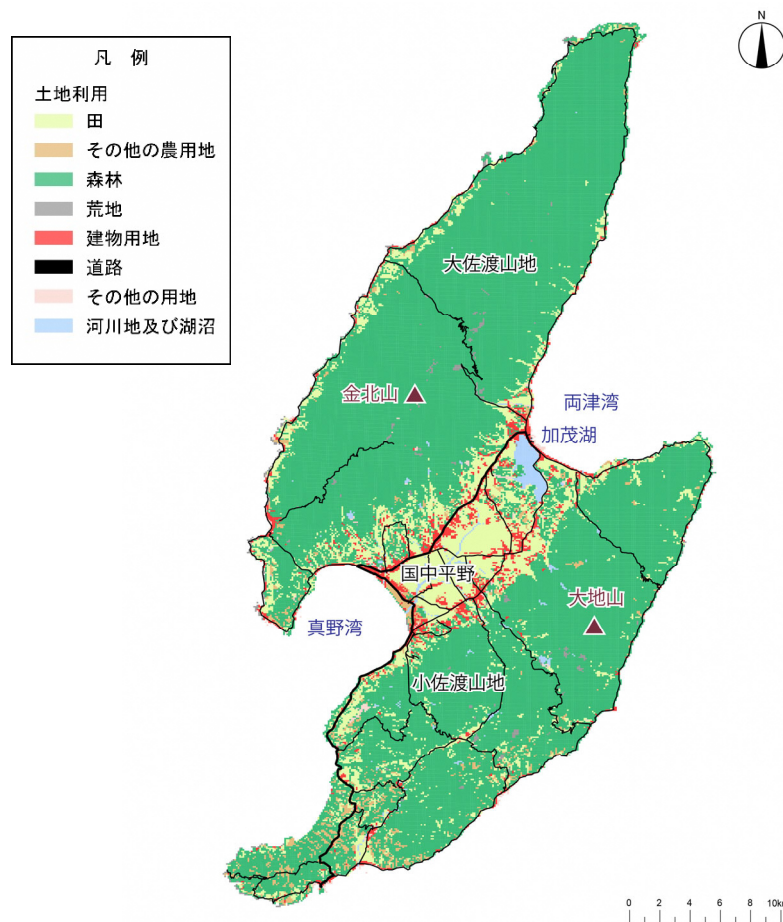
(2) 土地利用

本市の総面積は 855.7 km²（東京 23 区の約 1.4 倍）で、新潟県の市町村では 6 番目の面積を有している。平成 28（2016）年 5 月時点での地目別土地利用面積をみると、全体の 76.5%が森林で最も多く、次いで田が 12.9%である。建物用地は、31.2 km²で全体面積の 3.6%である。



地目別土地利用面積

資料：国土交通省「国土数値情報」をもとに作成



土地利用状況図

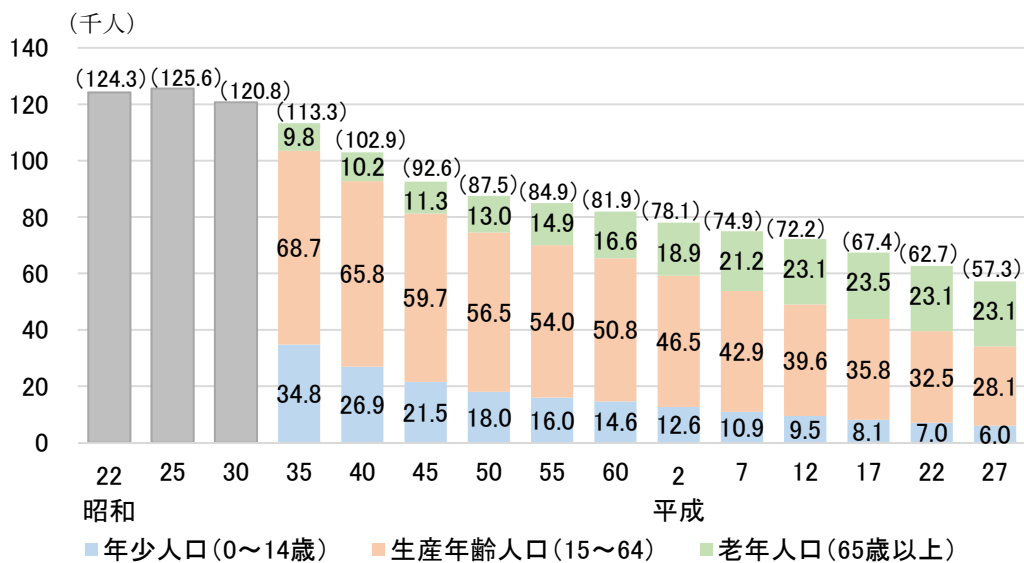
資料：国土交通省「国土数値情報」

(3) 人口動態

平成 27 (2015) 年の国勢調査によれば、本市の人口は 57,255 人で、平成 22 (2010) 年の国勢調査の人口 62,727 人より 5,472 人減少している。本市の人口のピークは昭和 25 (1950) 年の 125,597 人で、それ以来 5 年ごとの国勢調査のたびに減少しており、現在はピーク時の半数以下となっている。

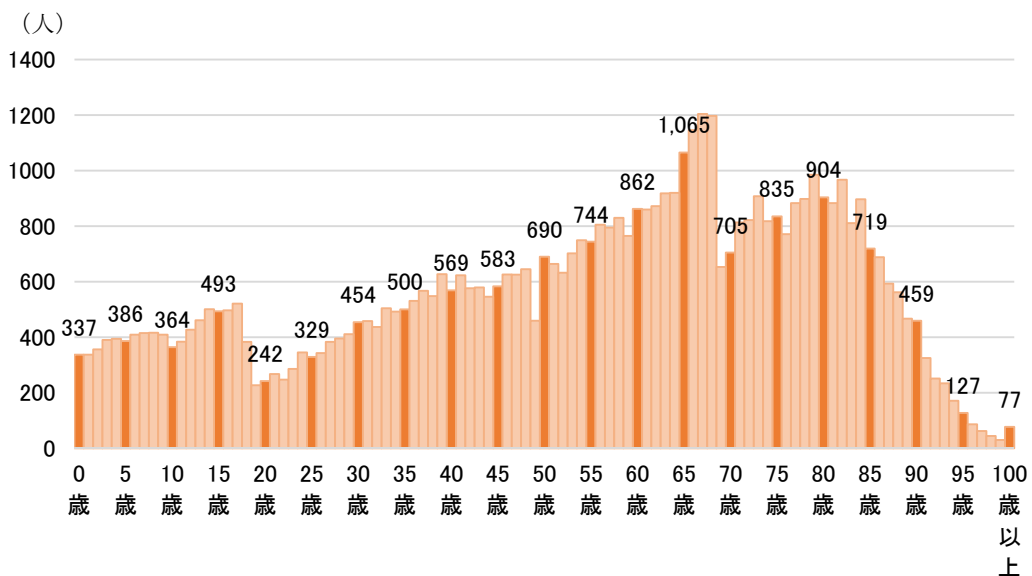
年齢三区分別人口では、年少人口 (15 歳未満)、生産年齢人口 (15 歳以上 65 歳未満) は減少傾向にあり、老年人口は、増加傾向で推移している。

年齢別人口では 65 歳前後が最も多く、老年人口比率 (65 歳以上の人口割合) は 40.3%と、全国平均の 27.3%を大きく上回っている。



総人口及び年齢三区分別人口の推移

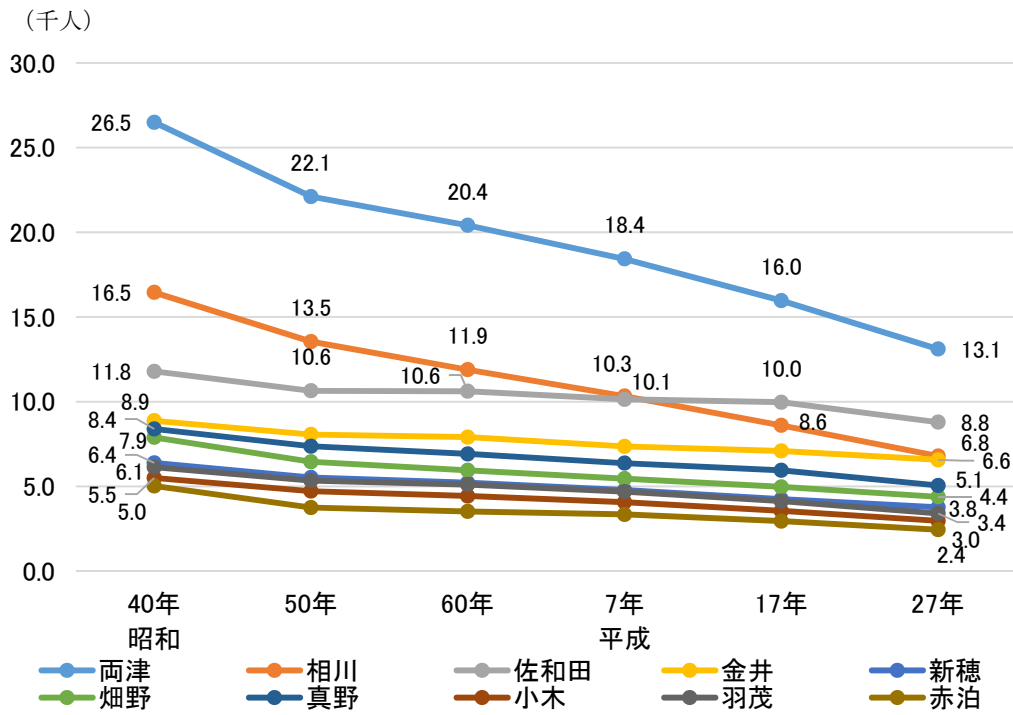
資料：総務省「国勢調査」



H27 年度年齢別人口

資料：総務省「H27 国勢調査」

地区別人口の推移では、いずれの地区も減少傾向で推移しているが、特に相川地区での人口減少が顕著であり、昭和40（1965）年と平成27（2015）年と比較すると58.8%減少し、約6,800人となっている。



地区別人口の推移

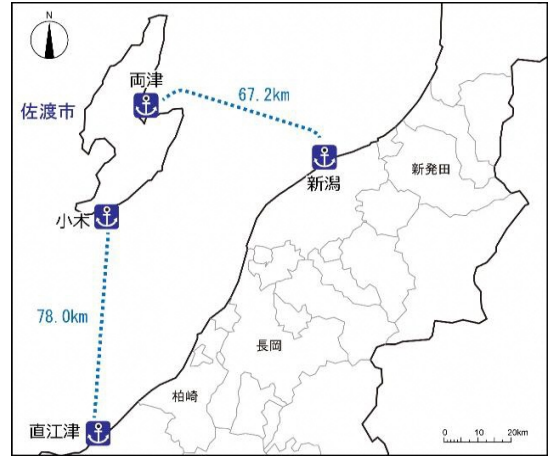
資料：総務省「国勢調査」

(4) 交通機関

本市は、両津航路（両津港～新潟港：67.2km、約2時間30分）、小木航路（小木港～直江津港：78.0km約1時間40分）の2航路により本州と結ばれている。

本市における道路交通網は、両津・佐和田・小木を結ぶ国道350号を基軸に、海岸線を一周する主要地方道佐渡一周線や内陸部の主要地方道及び一般県道により各地区が結ばれている。

公共交通機関は、主要道路上に市内バス路線が通っており、南北の外周部より中央部に向かってルートが設定されている。



佐渡汽船航路



道路交通網図



公共交通網図

資料：佐渡市地域公共交通網形成計画 抜粋

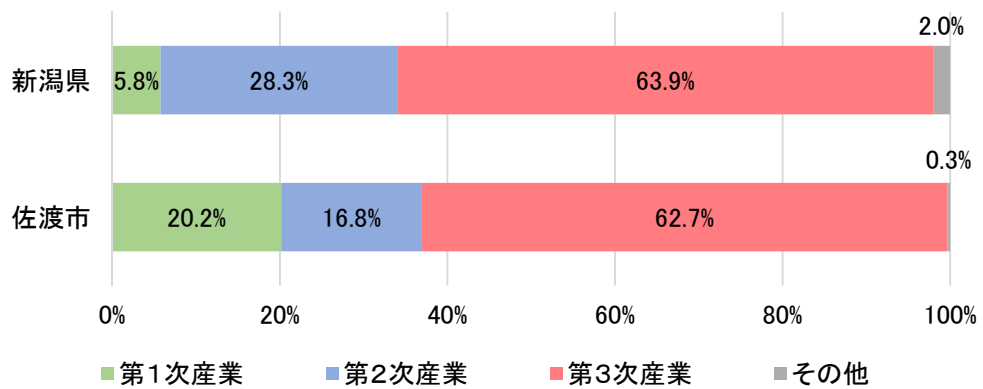
(5) 産業

平成27(2015)年の国勢調査における就業者数は29,087人であり、産業別にみると第1次産業が20.2%、第2次産業が16.8%、第3次産業が62.7%である。

第1次産業のうち、農業は水稲を主体とした経営形態である。地域性を活かして、国中平野では稲作、南佐渡では柿をはじめとする果樹栽培、海岸段丘では稲作と肉用牛の飼育が行われている。

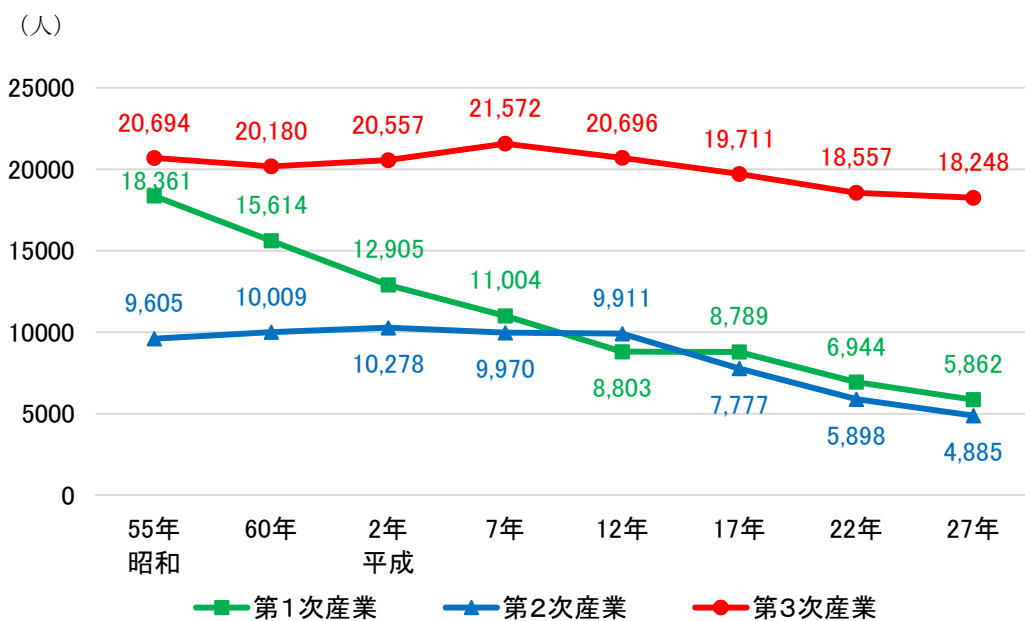
林業については、島の約80%を森林が占めており、保全や水資源のかん養など、多様な役割を果たしている一方で、木材価格の低迷や生産コスト増加による採算性の悪化などが原因となり、手入れの行き届かない森林が増加している。

周囲を海に囲まれた佐渡では、ブリなどの沿岸漁業が重要な産業となっており、漁業就労者は平成27(2015)年国勢調査で530人、平成28(2016)年の漁獲量は7,869tである。



産業区分別就業人口の割合

資料：総務省「H27 国勢調査」



産業区分別就業人口の推移

資料：総務省「国勢調査」

第2次産業は、食料品、窯業、出版・印刷、電気機械などが主であり、1事業所あたりの従業者数は、10人台で推移している。

第3次産業のうち、平成26（2014）年の卸売業は131事業所、従業者数712人、小売業は765事業所、従業者数3,381人であった。平成16（2004）年と比べ、卸売業と小売業の合計事業所数は466、従業者は1,361人、年間販売額は30,713百万円減少している。

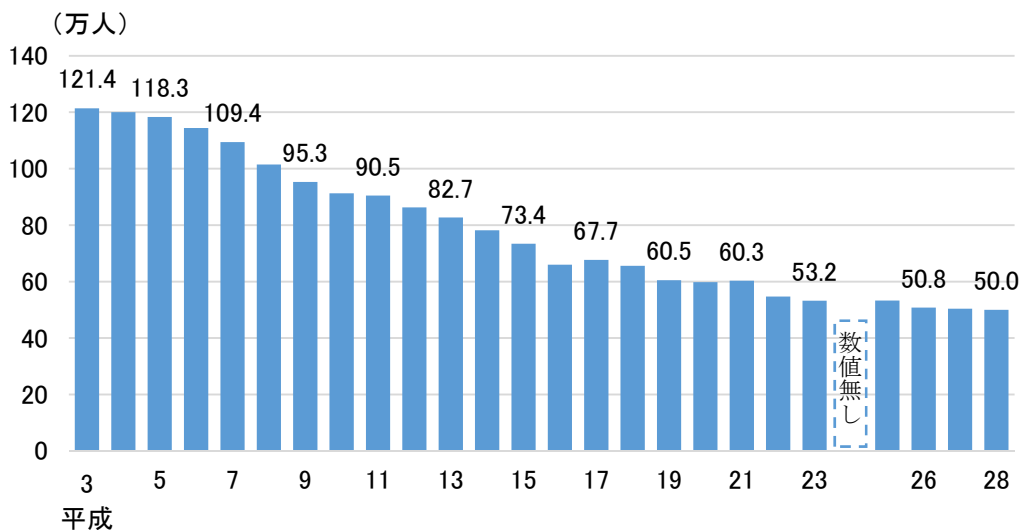
卸売業・小売事業所の推移

	事業所数（所）			従業者数（人）			年間販売額（百万円）		
	卸売業	小売業	総数	卸売業	小売業	総数	卸売業	小売業	総数
平成3年	243	1,613	1,856	1,360	4,936	6,296	62,564	68,154	130,718
平成9年	180	1,433	1,613	1,120	4,677	5,797	58,776	79,938	138,714
平成14年	177	1,264	1,441	1,084	4,601	5,685	53,683	69,342	123,025
平成16年	201	1,161	1,362	1,131	4,323	5,454	52,450	64,117	116,567
平成19年	171	1,065	1,236	962	4,101	5,063	48,813	61,464	110,277
平成26年	131	765	896	712	3,381	4,093	28,955	56,899	85,854

資料：経済産業省「商業統計調査」

（6）観光

本市は早くから観光地として注目されており、特に第1次産業の不振が続いている現在では、観光振興に寄せる期待は大きい。一方で、観光客の入込数は、平成3（1991）年に121万人まで増加していたが、以降は減少を続け、平成28（2016）年には50万人まで落ち込み、島内経済に与える影響は大きなものとなっている。そのなかで、地域の観光を取り巻く環境は大きく変化しており、団体旅行から個人旅行への移行が進んでいる。



年間観光客数の推移

資料：新潟県「佐渡観光客入込状況」(H3-23)、
佐渡市「佐渡観光アンケート調査」(H25-28、推計値)

3. 歴史的環境

(1) 歴史

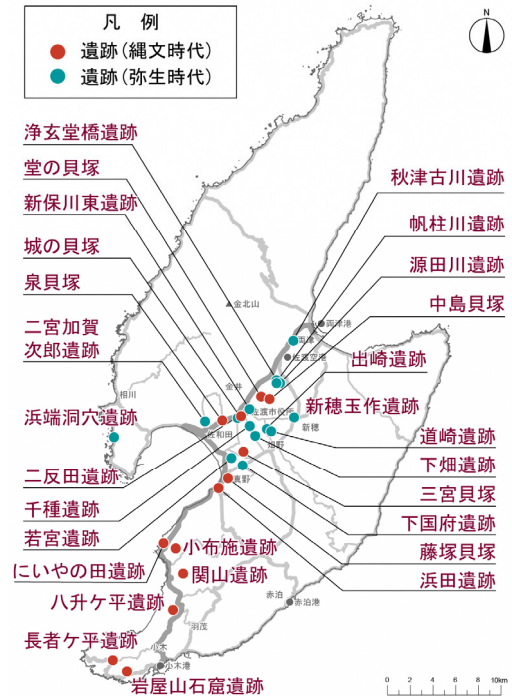
① 原始

i) 縄文時代以前

佐渡の記述は、『古事記』の国生み神話に「佐度島」が、大八島の7番目として登場し、『日本書紀』に「億岐州」と「佐度州」が双子として5番目に登場している。「さど」の地名の由来については、海路の狭い意味である「狭門」や、古代の佐渡三郡の一つである「雑太郡」と関連するなどの諸説がある。

佐渡で最古とされる草創期の遺跡である長者ヶ平遺跡からは、有舌尖頭器など多数の土器や石器が出土している。これらの出土品から、東北や関東の各地との交流や影響が顕著に認められ、当時の人々が広範な活動地域を有していたことが推測される。このほか、八升ヶ平遺跡で石槍、にいやの田遺跡、関山遺跡で局部磨製石器、小布施遺跡で尖頭器が出土し、岩屋山石窟遺跡からは早期の土器が出土している。

前期後半以降は縄文海進による海面上昇がみられ、国中平野周辺の舌状台地先端部を中心に遺跡が分布する。堂の貝塚からは埋葬人骨が確認され、藤塚貝塚や三宮貝塚、中島貝塚、城の貝塚、泉貝塚といった貝塚遺跡が数多くみられる。一方、南佐渡では長者ヶ平遺跡等で中期の土器や石器が多数出土している。また、藤塚貝塚や三宮貝塚、浜田遺跡からは中期末から後期の貝殻状痕を有する土器が出土しており、同系の土器が出土する山陰地方との文化的交流をうかがわせる。



縄文・弥生の主な文化財等の分布



有舌尖頭器



長者ヶ平遺跡

ii) 弥生時代

佐渡に弥生文化が伝えられたのは、弥生時代中期中ごろ（約 2,000 年前）で、本州の畿内文化の影響を受けたものが、北陸を経て伝わったとされる。水田耕作の影響により国中平野低地部では開拓が進み、新穂玉作遺跡に代表される赤玉石や碧玉を用いた数多くの玉作遺跡が存在する。



佐渡新穂玉作遺跡出土品

このほか、土壙墓群が検出された下畑遺跡、玉作工房跡が確認された新保川東遺跡、その他出崎遺跡、若宮遺跡等が代表的な玉作遺跡としてあげられる。この時期は、北海道から鳥取までの日本海側の多くの遺跡で佐渡産の管玉が出土しており、装身具や祭祀品が交易品あるいは権力者への貢納品として製作されていたと考えられる。

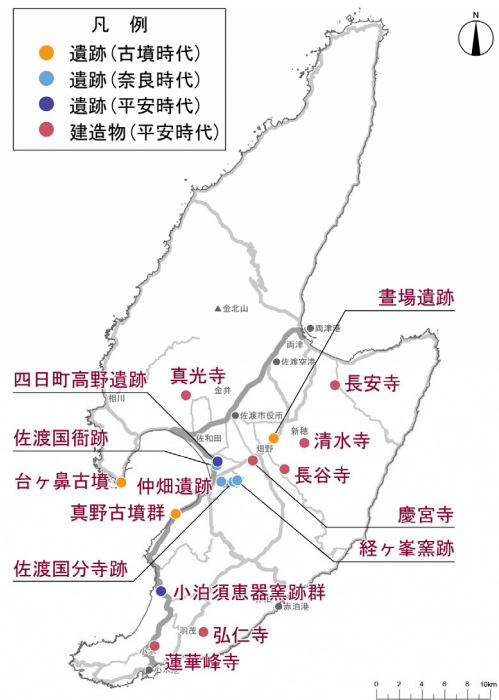
玉作遺跡以外では、二宮加賀次郎遺跡、浜端洞穴遺跡、秋津古川遺跡、道崎遺跡、銅鏃や管玉未製品が出土した浜田遺跡、下国府遺跡、二反田遺跡、浄玄堂橋遺跡、源田川遺跡、帆柱川遺跡、千種遺跡が主な遺跡としてあげられる。

② 古墳時代～古代

i) 古墳時代

沖積地には、古墳時代の遺跡が多く埋没している可能性が高い。晝場遺跡からは、平地式住居跡と想定される方形区画溝が検出されている。また、真野湾岸の段丘上に横穴式石室を伴う真野古墳群や台ヶ鼻古墳などの古墳時代後期の古墳がみられる。このように、古墳が佐渡一円ではなく、真野湾岸に集中して分布することは、古墳を墓制とする人々が他国から真野湾岸へ渡来した可能性がある。

『日本書紀』欽明天皇 5 (544) 年には、島の北部御名部の岸に、中国東北地方や沿海州に住んでいたツングース系の肅慎人が来着した記録があり、日本海を越えての交流があったことをうかがわせる。



古墳時代～古代の主な文化財等の分布

ii) 奈良時代

奈良時代には、佐渡は一国とされ、養老5(721)年に従来の雑太郡のほかに賀母(加茂)、羽茂の2郡が置かれ、1国3郡となった。その後、一時期越後国に編入されるが、天平勝宝4(752)年には再び佐渡国として独立、神亀元(724)年には、伊豆や隠岐とともに遠流の島と定められ、都から政治犯や思想犯が流されてくるようになった。当時の国府は下国府遺跡を含む一帯と考えられており、周辺には佐渡国衙跡、中央伽藍や塔跡が残る佐渡国分寺跡、雑太郡衙や雑太駅に推定されている仲畑遺跡などが所在する。台地上には佐渡国分寺瓦を生産した経ヶ峰窯跡などの生産遺跡もみられる。



台ヶ鼻古墳
たいがはな



佐渡国分寺跡

iii) 平安時代

平安時代中期に編纂された『延喜式』によると、佐渡国の等級は大上中下4段階の中国、京からの距離は近中遠の遠国、北陸道の終点とされ、陸奥・出羽国などとともに国土の辺境にして要地である「辺要国」に位置づけられていた。律令国家にとって佐渡は北の国境との認識が強かったものと考えられる。四日町高野遺跡からは、「軍」「団」の墨書土器が出土しており、治安維持のため佐渡国に配置された雑太団が実在していた可能性が高まった。この時期には、鉄の生産や製塩も盛んに行われ、大佐渡の山中や山麓一帯に砂鉄製錬の穴釜がみられる。また、素浜海岸や二見半島・外海府の海岸沿いなどに製塩遺跡が分布している。なお、9世紀初めごろから10世紀前半の須恵器を生産した小泊須恵器窯跡群の製品は、佐渡だけではなく、越後や出羽などでも出土しており、広い範囲で流通している。

『日本紀略』によれば、延暦21(802)年は、佐渡国の塩120石を当時蝦夷征伐の拠点であった出羽国雄勝城へ送っており、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』には、治安年間(1021~24)に能登国の鉄掘集団の長が来島した記録が残る。なお、この時能登の鉄掘は砂金を持ち帰っており、佐渡における金産出の初見とされている。



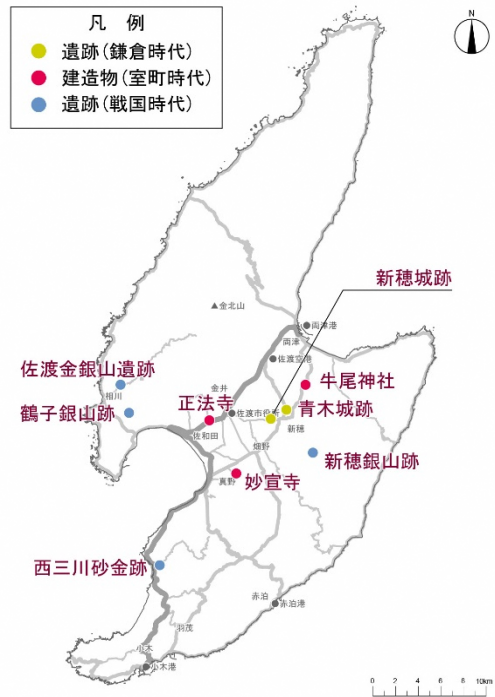
蓮華峰寺金堂
れんげぶ

平安時代後期には、畿内の有力寺社が佐渡に勢力を伸ばし、寺社領を増やしていったと想定される。近江国日吉神社や越前国氣比神社の社領が新穂大野周辺に成立したのがこのころであると推定される。また、谷間の奥地には、平安時代の創建伝承を持つ蓮華峰寺、弘仁寺、長谷寺、慶宮寺、清水寺、長安寺、真光寺といった有力寺院が進出し、谷地の水田開発に力を注いでいたことがうかがわせる。

③ 中世

i) 鎌倉時代

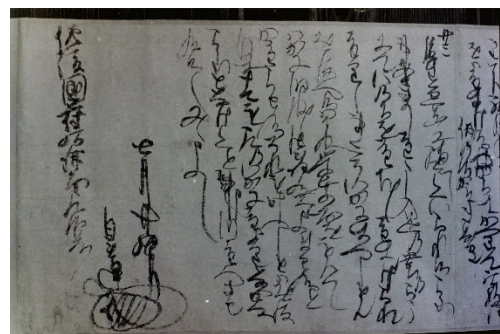
承久3(1221)年以後は、佐渡は鎌倉幕府の支配下に置かれ、北条氏一門の大仏氏が佐渡守護に任命された。その守護代として入国した相模国の本間氏は、承久の乱によって佐渡に流された順徳上皇の監視役を兼ねており、以後、その支配を佐渡全土に広げていった。鎌倉時代後期から南北朝期にかけては、本間庶子家による所領争いが起こったが、応永年間ごろ(1394~1428)には各地の地頭であった国人衆が土着化し、河原田本間氏、雑太本間氏、久知本間氏・吉住本間氏、羽茂本間氏など本間氏一族のほか、加茂の渋谷氏、金井地区吉井の藍原氏が勢力を伸ばしていった。単郭の堀や土塁を持つ新穂城跡・青木城跡など、現在も国中平野部一帯には土豪たちの城館跡が数多く残っている。



中世の主な文化財等の分布

ii) 室町時代

鎌倉から室町時代にかけては、順徳上皇をはじめ、日蓮・日野資朝・世阿弥などが相次いで佐渡へ流された。こうした人々によって伝えられた文化が、佐渡の信仰や生活に影響を及ぼしたことが、記録や伝承によってうかがえる。文永8(1271)年に佐渡配流となった日蓮は、在島中に『開目抄』『観心本尊抄』を著



日蓮上人筆書状

し、このとき日蓮にちれんに帰依した人々によって多くの日蓮宗寺院が開かれたという。妙宣寺には、日蓮直筆にちれんの書状が残されている。

永享6(1434)年に流された能の大成者である世阿弥ぜあみは、在島中に記した小謡曲『金島書』において、「金の島こがね、佐渡」と表現しており、当時佐渡で金が産出されていたことがわかる。正法寺には、世阿弥ぜあみが着けて雨乞いの舞を舞ったとされる「神事面べしみ」が伝えられている。佐渡での演能については、天文22(1553)年ごろに観世元忠(法名:宗節、世阿弥ぜあみの玄孫にあたる)が一座を連れて佐渡に渡り、河原田で能を舞った記録が『佐渡志』にある。また、牛尾神社の「能面翁うしお」や潟上に伝わる「能面大べしみ」といった室町時代末期ごろの能面が残されている。



神事面べしみ

iii) 安土桃山時代

安土桃山時代に入ると、沢根本間氏やかたがみ潟上本間氏といった新興の国人が勢力を伸ばし、島内各地で戦乱が相次いだ。また、鉱山開発も盛んに行われ、天文11(1542)年に発見された鶴子つるし銀山や、その後まもなくして発見された新穂にいぼ銀山などの鉱山を支配していた在地の国人層が新興勢力として台頭し始めたことが、島



史跡 佐渡金銀山遺跡

内各地の戦乱を招いた要因であると考えられている。天正17(1589)年、越後の上杉景勝うえすぎかげかつにより佐渡は平定され、以後上杉氏の代官が派遣され、佐渡は慶長5(1600)年まで上杉領として支配された。この前後、島内の金銀山の開発が行われ、文禄2(1593)年の西三川砂金山の再開発(『佐渡相川志』)、文禄4(1595)年に石見国いわみのくにから来島した3人の山師つるし※によって鶴子銀山に最新の鉱山技術が伝えられた(『佐渡国略記』)。佐渡最大の鉱山である相川金銀山(佐渡金銀山)が発見されたのもこの時期である。一方、慶長5(1600)年には上杉氏の代官河村彦左衛門かわむらひこによる検地が行われ、このときの佐渡の年貢高は2万1,000石であった。

④ 近世

i) 鉱山町の繁栄

慶長 5 (1600) 年の関ヶ原合戦以後、佐渡一国は徳川幕府の直轄地に編入され、同 8 (1603) 年には、石見^{いわみ}銀山や伊豆金山の奉行を兼ねていた大久保^{おおくぼ}長安が佐渡代官となり、相川^{あいはら}金銀山は活況を呈した。同 9 (1604) 年に相川に陣屋^{ちんや}* (後の佐渡奉行所) が建てられると、計画的なまちづくりが行われ、人口 5 万人を誇る日本海側きっての鉱山都市相川が成立した。元和 4 (1618) 年の奉行制への移行によって、鎮目^{しずめ}市左衛門・竹村^{たけむら}九郎右衛門が初代佐渡奉行となり、以後幕末まで 102 人の奉行が赴任した。こうした鉱山の繁栄に伴い、国内各地から山師、大工、測量技術者、商人といった職業の人々が集まり、様々な文化や芸能が伝えられることとなった。また、人口の急増に伴い島内の食料需要が増加し、海岸段丘や山間地での新田開発、砂丘地での野菜栽培が進められる一方、鉱山で使用する炭・木材等の生産資材確保のため、山間部の山林は「御林」として奉行所統制のもと、厳しい伐採管理が行われた。

17 世紀半ば以降は、経費の増大と坑道内の湧水が問題となり、金銀の生産高は減少の一途をたどった。元禄 3 (1690) 年に佐渡奉行となった荻原^{おぎわら}重秀は金銀山の復興に努め、同 9 (1696) 年、坑道内の排水のため南沢疎水道^{みなさわそすいどう}を完成させるなどの政策を行った。一方で、同 6 (1693) 年には佐渡で初めての実測検地を行い、島内の年貢高は慶長検地時の 2 倍の 4 万 587 石、村数は 263 か村、石高は 13 万石あまりとなった。これにより、島内の耕作面積や実耕作者が確定したが、享保 4 (1719) 年の年貢定免制導入による年貢増徴、役人の不正、飢饉の発生等を受け、寛延 3 (1750) 年には島内初の百姓一揆が勃発し、以後、明和 4 (1767)



近世の主な文化財等の分布



佐渡奉行所



南沢疎水道 (史跡 佐渡金銀山遺跡)

年、天保9（1838）年にも一國騒動が起こった。

また、文化元（1804）年に始まるロシアの南下政策に対する海防政策として、同5（1808）年に佐渡に台場が設置された。天保13（1842）年の『佐州海岸通測量野帳』によると相川の小川や小木半島の沢崎など、島内の海岸線59か所に台場を設置したことが記録されている。嘉永3（1850）年には鶴子で大筒の鑄造が行われた。大砲の砲身装飾の技術はのちの蠟型鑄金技術に受け継がれ、昭和35（1960）年には佐々木象堂（佐々木文蔵）が重要無形文化財「蠟型鑄造」（各個認定）保持者に認定された。

ii) 港町の繁栄

江戸時代の金銀山の繁栄は、佐渡をめぐる海運の活動をも活発化させた。生活物資の不足を背景に、越後・津軽から米、庄内から炭・薪、敦賀から油・衣料・紙などが移入され、相川・沢根・五十里といった港が搬入港として栄えた。そのほか、小木は金銀の積出港として、赤泊・夷・松ヶ崎などは越後と佐渡を結ぶ港として発展した。鉱山の衰退が始まる寛文年間（1661～73）からは、西廻り航路の開設とあいまって、小木港が廻船の寄港地となり、相川を凌ぐ繁栄をみたという。宝暦元（1751）年には、それまで禁止されていた島内物資の他国出しが許可され、松前交易が盛んとなり、竹細工・藁細工・串柿・味噌・醤油などが移出された。また、元文年間（1736～41）以降は島内産の干鮑・煎海鼠が長崎俵物として重宝され、幕末まで中国への輸出品として扱われた。



復元された千石船「白山丸」

iii) 文化の興隆

19世紀初頭には、相川の黒沢金太郎が地元の土を高熱で焼く施釉陶器の生産に成功し、島内での本格的な窯業の端緒となった。この金太郎焼は、釉薬に金銀製錬滓である「カラミ」を用いるのが特徴で、昭和47（1972）年の発掘調査では、窯跡から大量のカラミが出土している。明治時代に入ると、金太郎焼を発展させ、佐渡金銀山坑内から出る酸化鉄を大量に含む赤色の無名異土を原料とした無名異焼が相川の三浦常山や伊藤赤水ら



無名異焼

によって確立され、平成 9 (1997) 年には、三浦小平二^{みうらこへいじ}が重要無形文化財「青磁」^{せいじ}（各個認定）保持者に、平成 15 (2003) 年には五代伊藤赤水^{いとうせきすい}（伊藤窠一）が重要無形文化財「無名異焼」^{むみょうい}（各個認定）保持者に認定された。

そのほか、天保年間（1830～43）には、羽茂の氏江氏^{はもちうじえ}によって製造された千歯扱き^{ちこ}（稲扱機）が諸国で評判となり、越後・信州・出羽・会津方面へ大量に移出された。

このようにして、金銀山の開発に伴う江戸の武家文化、全国各地から移住してきた技術者集団の文化、さらに北陸や西日本の町人文化が加わり、渾然一体となって近世期の佐渡の文化が創り上げられていった。

江戸時代初期に能楽を伝えた大久保長安^{おおくぼながやす}は、相川に春日社を建立し、能を演じさせた。以後島内各地に能が広まり、慶安年間（1648～52）には新穂潟上^{にいぼかたがみ}に宝生流の能太夫本間左京家が成立し、幕末には 100 社以上の神社に能舞台が設置されていた。現在も 35 棟の能舞台が残っており、地元の愛好家などにより、能



能楽

が演じられている。また、能と関係の深い狂言は、文政 6 (1823) 年に新穂潟上^{にいぼかたがみ}の葉梨源内^{はなしげんない}が江戸で鷺流^{さぎ}を修行したのが始まりとされ、現在、佐渡鷺流狂言研究会により伝承されている。

佐渡の人形芝居は、享保年間（1716～36）に伝わったとされる「説経人形」「のろま人形」が最も古いとされ、説経人形は太夫の豪快な語りに合わせて軽快な動きをみせる合戦物が多く、のろま人形は一人遣いで方言を交えた滑稽卑属な話が特徴である。「文弥人形」^{ぶんや}は、延宝年間（1673～81）ごろに大坂で流行した文弥節を継承する古浄瑠璃で、幕末に上記の人形芝居と結びついて確立した。



佐渡の人形芝居

佐渡を代表する芸能である鬼太鼓は、安永年間（1772～80）の記録によれば、金銀山で働く鉱夫たちがタガネ*を持って舞ったのが始まりとされ、現在も 100 以上の集落において、神社の祭礼に、悪魔払い・商売繁盛・五穀豊穰を祈る目的で奉納されている。

全国的に有名な「佐渡おけさ」は、九州地方に伝わる「はんや節」が北前船の船乗りたちにより小木港へもたらされ「小木おけさ」として広まったものが原型とされ、のちに相川金銀山の鉱夫たちによって「選鉱場節」として哀愁漂うメロディが付され、明治 39 (1906) 年に「佐渡おけさ」となり、今に伝えられている。

設立された。同 20 年代初頭には県下に先駆けて牛馬耕が導入され、大正時代には全島に耕地整理の動きが広まった。水産業では明治時代末から大正時代初期にかけて大謀網漁^{だいぼうあみ}が富山県から導入され、昭和時代初期には加茂湖でカキの養殖が成功している。明治時代中期ごろからは、小木半島で、たらい舟を利用した磯ネギ漁が行われるようになった。

産業面では、戦後の農地改革により、佐渡の小作率は 29.3%から 7.8%に減少し、ほとんどの農民が自作農へと転換した。羽茂地区^{はもち}では柿の栽培が盛んになり、現在「おけさ柿」の名称で全国的に知られている。漁業では、昭和 20 年代に新潟の五大漁業として佐渡のスケソウダラの延縄漁業、ブリ・サバの大型定置網漁業、イカ釣り漁業が盛んとなり、昭和 30 年代からはカキやワカメの養殖業も行われ、現在も佐渡を代表する海産物となっている。

観光業は、昭和 42（1967）年の佐渡汽船カーフェリーの両津－新潟航路就航により上向きに転じ、同 52（1977）年の上越新幹線の開業、島内観光ルートの整備、バブル景気などにより、観光客は平成 3（1991）年に過去最高の 121 万人を記録した。しかし、その後は減少の一途をたどり、現在は、年間 60 万人程度まで減少している。

ii) 文化財の保全活動

佐渡鉱山は、平成元（1989）年に操業を停止したが、近年佐渡金銀山の世界文化遺産登録運動が起こり、再び脚光を浴びている。平成 22（2010）年には、この佐渡金銀山遺跡が、日本の世界遺産暫定リストに「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」として記載され、登録に向けての活動を進めている。

そのほか、平成 20（2008）年からは特別天然記念物トキの繁殖が進められており、自然放鳥が行われるなど野生復帰への取り組みが進められ、平成 24（2012）年には、36 年ぶりに自然界でトキのヒナが誕生した。トキとの共生を目指す佐渡では、平成 23（2011）年に「トキと共生する佐渡の里山」として、日本初の世界農業遺産（GIAHS）^{ジアース}に認定され、後世に残すべき景観とされている。また、同年には、史跡や名勝・天然記念物などが多く残る自然豊かな島として、保全活動や様々な魅力の発信といった佐渡ジオパークの活動を始め、平成 25（2013）年には、日本ジオパークに認定された。

(2) 佐渡ゆかりの人物

① 順徳上皇 建久8(1197)年～仁治3(1242)年

順徳上皇は後鳥羽上皇の皇子として承久の乱に加わったかどで佐渡へ流罪となった。配所と伝えられる金井地区泉に黒木御所がある。在島22年目を迎えた仁治3(1242)年に佐渡で崩御された。上皇を茶毘に付したと伝えられる火葬塚が真野御陵として今日に伝えられている。在島中に多くの和歌を詠むなど、島内各地に順徳上皇のゆかりの場所が伝えられている。



順徳上皇

② 日蓮 貞応元(1222)年～弘安5(1282)年

安房国小湊生まれで文永8(1271)年に極楽寺良観の祈雨を侮辱したかどで佐渡流罪となった。時に50歳。塚原の三昧堂に入り『開目抄』を著す。翌9(1272)年に一の谷に移り『観心本尊抄』を著した。文永11(1274)年に赦免となる。身延での隠棲中、佐渡で日蓮の信奉者となった阿仏坊夫妻や国府入道、中興入道に消息を送っている。佐渡で過ごした日々は、日蓮の思想形成に大きく影響したといわれている。



日蓮

③ 日野資朝 西応3(1290)年～元弘2(1332)年

鎌倉時代末期の後醍醐天皇の朝臣で、正中元(1324)年に天皇と共に倒幕計画に参加したが、計画が露呈し、幕府に捕らえられた。その責めを負い、翌2(1325)年に佐渡に流され、雑太城主本間山城に預けられた。在島中に父母の死を聞き、その冥福を祈り細字法華経(重要文化財)を書き残した。配流7年目の元弘元(1331)年、後醍醐天皇等による元弘の乱も再び失敗に終わると、日野資朝は本間山城に斬られた。



日野資朝

④ 世阿弥 貞治2(1363)年～嘉吉3(1443)年

能の大成者として知られる世阿弥は、後継者問題で将軍足利義教の逆鱗にふれ、71歳という高齢で佐渡へ流罪となった。明治42(1909)年に東京で「世阿弥十六部集」が発見され、そのなかに含まれていた『金島書』により、世阿弥の佐渡での様子が知られるようになった。ゆかりの場所としては泉の正法寺が知られる。



世阿弥 (正法寺蔵)

⑤ 大久保長安 天文14(1545)年～慶長18(1613)年

甲州武田家猿楽師大蔵太夫の次男で、田辺十郎左衛門のもとで黒川金山の経営に携わった。武田氏の滅亡後、小田原城主大久保相模守忠隣に預けられ、徳川家康の幕下となった。慶長5(1600)年に石見銀山、同8(1603)年には佐渡金銀山の支配を命ぜられた。没年の慶長18(1611)年まで佐渡代官の地位にあり、相川に陣屋を移すなど、相川町の整備に携わった。



大久保長安

⑥ 小倉大納言実起 元和8(1622)年～貞享元(1684)年

寛文11(1671)年に小倉実起の娘が霊元天皇の子一宮を産み、皇位継承の内示を受けていたが、状況が変わり一宮に出家の命が出された。外祖父の実起がこれを拒否したことにより、実起と子の公連、季連は佐渡に流された。相川や国中地域の富豪等と交流をもち、庭園造りなどにも携わった。相川鹿伏の観音寺に墓地があるほか、持仏としての銅造観世音菩薩立像(県指定有形文化財)が伝えられている。



小倉大納言実起

⑦ 萩原重秀 万治元(1658)年～正徳3(1713)年

勘定吟味役時代から佐渡奉行に任命された。元禄時代(1688～1704)に小判の改鋳を行った人物として知られている。佐渡では元禄検地を実施し、年貢の増収による財政の立て直しや、南沢疎水道の開削をはじめとする金銀山の再興に尽力した。22年の任期は歴代佐渡奉行のなかでは最長となるものであった。後に新井白石との関係が悪化して弾劾された。

⑧ ^{しばた しゅうぞう}柴田収蔵 文政3(1820)年～安政6(1859)年

文政3(1820)年に宿根木に生まれた蘭学者で、20歳の金比羅参りの際、船中で蘭医に会い洋学に興味を持ったとされる。嘉永元(1848)年に「新訂坤与略全図」という世界地図を作製した。その地図には、「左度(佐渡)」や「相川」に加え、郷里の「シュクネギ(宿根木)」が掲載されている。安政4(1857)年に蕃書調所^{しよしちべしよ}の絵図調出役を命ぜられたが、同6(1859)年に40歳で没した。



^{しばた しゅうぞう}柴田収蔵

⑨ ^{ます だたかし}益田孝(鈍翁) ^{どんのう} 嘉永元(1848)年～昭和13(1938)年

嘉永元(1848)年に相川で生まれ、父は佐渡奉行所の役人であった。若くして英語を習得し、15歳で父の随員として渡欧し、英国軍隊や外国商館に勤務。帰国後大蔵省役人となったが、28歳で三井物産を創業し社長となる。日本経済新聞の前身「中外物価新報」を創刊し、さらには三池炭鉱の吸収や、台湾製糖の設立にも携わった。三井コンツェルンの形成により男爵となる。日本の資本主義草創期の中心人物の一人。文化的にも茶道や古美術収集家としても著名。昭和13(1938)年に没した。



^{ます だたかし}益田孝

⑩ ^{はぎの よしゆき}萩野由之 万延元(1860)年～大正13(1924)年

万延元(1860)年、相川の彫刻家の子供として生まれた。8歳で圓山溟北^{まるやまめいほく}に入門し、明治13(1880)年に上京。東京大学古典講習科を卒業し、元老院書記生となる。その後学習院・東京高等師範学校等で教鞭をとり、明治34(1901)年に文学博士、東京大学教授となった。帝国学士院会員や宮内省御用掛に任ぜられた。日本史一般のほか、『佐嶋遺事』や『佐渡人物志』など佐渡に関する著作も多い。また、『佐渡年代記』や『佐渡風土記』など佐渡の歴史研究のための基本史料の収集と刊行化を行った。大正13(1924)年に没した。



^{はぎの よしゆき}萩野由之

⑪ ^{むらたぶんぞう}村田文三 明治 15(1882)年～昭和 31(1956)年

明治 15 (1882) 年相川五町目浜町の漁師の家に生まれる。16 歳で北海道へ 4 年間の出稼ぎに行き、帰郷して佐渡鉦山に勤めた。現在も活動が続けている民謡団体の立浪会に入会した。選鉦節で知られる選鉦場に勤め、声量のよさが認められ、大正 15 (1926) 年に民謡をレコードに吹き込んで以来、全国にその名が知られた。昭和 28 (1953) 年相川町の名誉町民に選ばれ、日本民謡協会の「技能賞」を受賞した。昭和 31 (1956) 年 74 歳で没した。



^{むらたぶんぞう}村田文三

⑫ ^{ささきぶんぞう}佐々木文蔵 (佐々木象堂) 明治 15(1882)年～昭和 36(1961)年

明治 15 (1882) 年に河原田に生まれる。18 歳で宮田藍堂^{みやたらんどう}に師事し、蠟型鑄金^{ろうがた}の技法を習得する。後に上京し、日本美術協会への出品作品が入賞し、宮内省買上となった。太平洋戦争中は金属供出の影響を受け、一時陶器作りに転じた。昭和 35 (1960) 年に重要無形文化財「蠟型鑄造」^{ろうがた} (各個認定) 保持者に認定され、真野名誉町民に選ばれたが、昭和 36 (1961) 年に没した。



^{ささきぶんぞう}佐々木文蔵

4. 文化財の分布状況

文化財の種類別指定等の状況（平成31年4月現在）

種別		国	県	市	計	
有形文化財	建造物	8	7	20	35	
	美術工芸品	絵画	-	3	11	14
		彫刻	5	12	27	44
		工芸品	2	1	13	16
		書籍・典籍	1	1	8	10
		古文書	1	1	23	25
		考古資料	2	5	9	16
		歴史資料	-	5	13	18
無形文化財	演劇、音楽、工芸技術等	1	2	3	6	
民俗文化財	有形の民俗文化財	4	9	21	34	
	無形の民俗文化財	3	6	14	23	
記念物	遺跡	4	13	20	37	
	名勝地	2	1	-	3	
	動物、植物、地質鉱物	4	8	40	52	
文化的景観	棚田、里山、用水路等	2	-	-	2	
伝統的建造物群	宿場町、城下町、農漁村等	1	-	-	1	
登録有形文化財	建造物	72	-	-	72	
合計		112	74	222	408	

種別		国	県	市	計
文化財の保存技術	選定保存技術	-	1	-	1

種別		国	県	市	計
記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財		8	7	-	15

（1）国指定等文化財

本市には開基が古いとされる寺院が多く現存し、明治時代の古社寺保存法による旧特別保護建造物や旧国宝指定の文化財が8件所在する。文化財保護法制定後も重要文化財や記念物の指定が進み、新潟県内自治体において国指定文化財の件数が最も多くなっている。

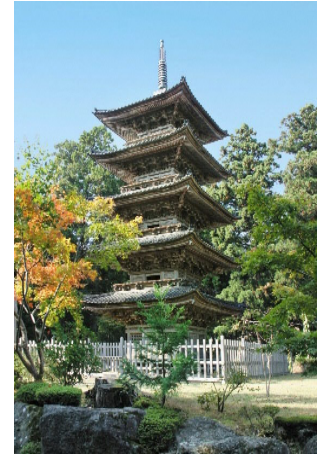
① 有形文化財

有形文化財では、妙宣寺五重塔をはじめとする社寺建造物や仏像彫刻、工芸品が中心である。近年では佐渡金銀山遺跡が世界文化遺産登録を目指すなか、近世・近代の鉱山施設が重要文化財や史跡の指定を受けた。

i) 妙宣寺五重塔（重要文化財）

日蓮聖人^{にちれん}に帰依した佐渡人最初の檀那・日得上人が、弘安2(1279)年以前に開いた金井新保の道場「阿仏房」^{あぶつぼう}を前身とし、天正17(1589)年に現在地へ移った際に妙宣寺の寺号を起こしたといわれている。

境内の五重塔は、文政8(1825)年に建立された。建築様式は和様の三間五重塔婆で、全高約24mあり、新潟県内では唯一の五重塔である。



妙宣寺五重塔

ii) 木造阿弥陀如来坐像（重要文化財）

木造阿弥陀如来坐像は、文明11(1479)年ごろ、明蔵阿闍梨が薬師如来像（市指定有形文化財（彫刻））とともに長安寺に寄進したものと伝えられ、現在は銅鐘（重要文化財）とともに宝物庫に安置されている。

像高約87cm、檜材寄木造の漆箔で、頭部は螺髪肉髻、額には水晶の白毫^{びやくごう}が嵌め込まれ、阿弥陀定印を結んで吹寄九重蓮華坐に結跏趺坐している。穏やかでよく整った容貌や浅い衣文の彫り方、寄木細工の手法などから平安時代後期の作品と推定されている。

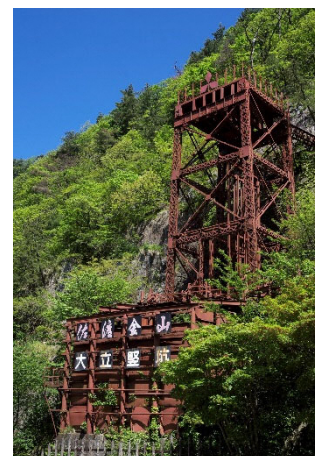


木造阿弥陀如来坐像

iii) 旧佐渡鉱山採鉱施設（重要文化財）

旧佐渡鉱山採鉱施設は、昭和13(1938)年の重要鉱物増産法施行により整備された民間経営の施設を中心とするもので、大立堅坑を軸として坑内の各採鉱場から集められた鉱石は、鉱車に積まれて道遊坑及び高任坑^{たかとう}を経由して高任粗砕場^{たかとう}に運ばれ、破碎・選別されたあと、貯鉱舎に貯蔵された。また、施設の一部は平成元(1989)年まで使用されていた。

これら採鉱に関わる施設は現在も一体的に残されており、昭和戦前期における鉱山の採鉱システムを今に伝えるものである。



旧佐渡鉱山採鉱施設

② 無形文化財

i) 無名異焼（重要無形文化財）

相川地区を拠点とする佐渡の焼物の焼成技法である。相川出身の陶芸家である伊藤窯一氏は、昭和41（1966）年に佐渡に帰郷し、祖父の三代赤水せきすいの下で無名異焼むみょういを学んだのち、同52（1977）年に「五代伊藤赤水いとうせきすい」を襲名した。

同氏の作品は、国内の様々な作品展で受賞を重ねるようになり、1980年代からは世界各国の展示会に作品が招待されるようになった。その功績と独自の技法が高く評価され、平成15（2003）年7月10日に重要無形文化財「無名異焼むみょうい」（各個認定）保持者（いわゆる人間国宝）に認定された。



無名異焼むみょうい

③ 記念物

史跡では、佐渡国分寺跡しもこう、下国府遺跡ちようじやがだいら、長者ヶ平遺跡等が指定されている。そのほか、特別天然記念物のトキ、昭和9（1934）年に指定された名勝・天然記念物の佐渡海府海岸や佐渡小木海岸、天然記念物の御所ザクラや羽吉の大クワなどの植物等がある。

i) 佐渡国分寺跡（史跡）

佐渡国分寺の西隣、国中平野を見下ろす高台に広がる旧国分寺の伽藍跡がらんで、現存する建物はないものの、礎石（柱を立てる土台石）が残されており、近年の整備事業により往時の伽藍の様子もよくわかるようになっている。

天平15（743）～宝亀6（775）年までのあいだに建立されたと考えられており、寺伝によると、旧国分寺境内の七重塔は正安年間（1299～1301）の雷火により焼失し、伽藍も戦国の争乱で焼失したと伝わる。本尊の「薬師如来坐像」（重要文化財）は幸いにも戦火を逃れ、移転・再建された現在の佐渡国分寺に安置されている。



佐渡国分寺跡

ii) トキ（特別天然記念物）

日本のトキは、大正時代には絶滅したと考えられていたが、昭和初期に佐渡での生息が報じられ、その後の確認により天然記念物に指定された。戦後には特別天然記念物や国際保護鳥に指定され、昭和 42(1967)年には新潟県が佐渡トキ保護センターを設置したものの、個体数は減少の一途をたどり、昭和 56(1981)年には最後の野生の 5 羽を一斉捕獲した。平成 11(1999)年に中国から送られた 2 羽の繁殖が成功し、年々個体数は増え続けたが、そのなかで平成 15 (2003)年には国産最後の 1 羽であった「キン」が死亡した。環境省による野生復帰ステーションの整備をはじめとする個体数増加の活動が実を結び、平成 20 (2008)年に初の試験放鳥が実施された。その後自然繁殖にも成功し、佐渡の人々は再びトキと共生することとなった。



トキ

④ 民俗文化財

民俗文化財も数多く、各地の博物館の調査成果として、北佐渡あるいは南佐渡の漁撈用具や船大工用具、海府の紡織用具が重要有形民俗文化財の指定を受けている。また、佐渡の人形芝居（説経・のろま・文弥人形）や車田植は重要無形民俗文化財に指定されている。

i) 佐渡の車田植（重要無形民俗文化財）

北鶴島で毎年 5 月中旬～下旬ごろに行われる古風な田植仕舞いの習俗で、3 人の早乙女が、最初に田の中央に苗を植え、それを中心に後ずさりしながら渦を描くようにして苗を植えていく。苗を車状とする理由については、「太陽の形」や「神が降りる目印」を表すことで、豊作を祈願しているものと推測されている。かつては、岩手県や岐阜県、高知県などにも同様の習俗が伝わっていたが、現在ではそのほとんどが消滅しており、佐渡でも相川地区高瀬・千本・大倉などに伝わっていたが、現在は北鶴島の北村家のみに伝わる。



佐渡の車田植

車田植は、北村家の最も広い田で行われ、畦で歌われる田植唄に合わせて 3 人の早乙女が田植えをし、その後の稲刈り・乾燥・粃すりなどが他の田んぼと区別して行われるなど、集落の古い農耕習俗を忠実に伝えており、全国的にも希少な習俗である。

⑤ 重要伝統的建造物群保存地区

i) 佐渡市宿根木伝統的建造物群保存地区

宿根木は本県で唯一、重要伝統的建造物群保存地区に選定された地区であり、北前船交易の文化を今に伝えている。

宿根木が最も繁栄したのは西廻り航路が全盛の江戸時代後期から明治時代初期のことであり、当時は、船主や船乗り、船大工、鍛冶屋、桶屋などほぼ全ての村民が廻船業に携わった生活を営み、独自の町並みと文化を形成していた。現在も、石屋根がおりなす家並みや三角家等が残されている。



佐渡市宿根木伝統的建造物群保存地区

⑥ 重要文化的景観

相川や西三川の鉱山に関するまち並みの景観が重要文化的景観に選定されており、本県では佐渡だけに所在する新たな文化財である。

i) 佐渡相川の鉱山及び鉱山町の文化的景観

相川では、17世紀初頭に金銀鉱脈が発見され、急速に鉱山開発が進み鉱山町が形成された。また、慶長8(1603)年に佐渡代官となった大久保長安おおくぼながやすによって、町づくりが行われた。

現在も、当時の地割りや平屋構造の町家が継承されており、鉱山地区の生産機能、上町地区(以下、「上町」とする)の居住・行政機能、下町地区(以下、「下町」とする)の流通・行政機能が、金銀山の盛衰に伴い動的な関係を構築しつつ展開してきた相川の歴史的変遷を示している。



佐渡相川の鉱山及び鉱山町の文化的景観

(2) 県指定文化財

新潟県指定文化財は、本市に74件所在しており、件数では県内市町村で最多である。その種別は、彫刻が12件、建造物が7件、歴史資料が5件、民俗文化財が15件、史跡が13件、天然記念物が8件など多岐にわたっている。

① 有形文化財

建造物では、^{けいこう じ はっ そどう}慶宮寺八祖堂をはじめとする江戸時代の寺社建築や個人住宅などがある。彫刻は平安から江戸時代にかけての仏像彫刻が主流で、絵画では洛中洛外図六曲屏風や三十六歌仙絵馬扁額がある。古文書や歴史資料には、佐渡金銀山関連資料や医学・和算書がある。



佐渡熊野神社能舞台

i) ^{けいこう じ はっ そどう つけたり}慶宮寺八祖堂（附 厨子1基）（有形文化財）

^{けいこう じ}慶宮寺の前方に建てられている仏堂で、堂内の方形の内陣には八角形の回転式厨子が備わっており、上層に金輪仏頂を祀り、中に八祖像を安置する。建立年代は定かではないが、寺の記録によると、文化9（1812）年の再建と記されている。



^{けいこう じ はっ そどう}慶宮寺八祖堂

仏堂は全体的に唐様の様式に統一され、細部に絵様、彫刻を付け加え、^{とぎょう}斗栱の形式や木割に古風な地方色を残しているなど、江戸時代末期における佐渡の建築技術の水準をよく示している。

ii) ^{しほんきん じ ちゃくしよくらくくちゅうらくがい ず ろつきよくびょう ぶ}紙本金地 著色洛中洛外図六曲屏風（有形文化財）

金地に金雲を併せ用い、その間に京都の洛中・洛外で繰り広げられる祭礼、遊樂、生業などの様子を描いた極彩色の六曲屏風である。雲形をはじめ、五弁桜花や亀甲のなかに四弁の花といった類の文様を、置上文として施す豪華で華やかな金雲に、工芸意匠的な趣向が強く示されている。



^{しほんきん じ ちゃくしよくらくくちゅうらくがい ず ろつきよくびょう ぶ}紙本金地 著色洛中洛外図六曲屏風

この屏風は、両津夷の廻船問屋本間儀左衛門が京都で買い求め、菩提寺の妙法寺に寄贈したものと伝えられ、図中の諸風物や構図、技法などから、制作年代は江戸時代前期、狩野派とは別の大和絵系に属する作品とみられている。

② 無形文化財

無形文化財としては蠟型^{ろうがた}鑄金技術と鷺流^{さぎ}狂言が指定されている。

i) 佐渡の蠟型^{ろうがた}鑄金技術（無形文化財）

この鑄金技法は、弘化4（1847）年に佐渡奉行中川飛騨守の依頼を受けた初代本間琢齋が沢根鶴子^{つるし}で大砲を鑄造する際、砲身の模様を蠟型^{ろうがた}で鑄造したことがその起源とされている。

蜜蠟^{ろう}を主体として練り合わせた蠟^{ろう}で作品の原型を作り、それを土で塗り覆い、土が乾燥したあと、湯口を下にして窯の中で蠟^{ろう}を溶かし、土の中から流出させて、空洞になったところへ溶かした銅合金（銅・鉛・錫・亜鉛）を注入する。その後の仕上げ着色の工程を経て完成したものは、まさに一品製作の美術品そのものである。

また、着色工程では、使用する薬品により、古銅色や青銅色など数種類の色を引き出す技法があるが、中でも代表的なものは斑紫銅色で、その技法は創始者の初代本間琢齋より代々受け継がれている。



佐渡の蠟型^{ろうがた}鑄金技術

③ 民俗文化財

有形民俗文化財には人形首^{くび}のほか、能舞台が含まれているのが特徴であり、35棟の能舞台群のうち、保存や活用のうえで主要な舞台が指定されている。無形民俗文化財は、花笠踊、田遊び神事、流鏝馬、大神楽など多様である。史跡には、日本海側では稀少な貝塚、洞穴遺跡、玉作遺跡、古墳、須恵器窯跡、中世城館跡など、考古学における佐渡の特徴があらわれている。天然記念物としては、植物群落や巨木が指定されている。

i) 人形首^{くび}（説教人形、のろま人形）（有形民俗文化財）

新穂地区の広栄座^{こうえいざ}に伝わっている50頭ほどの古浄瑠璃人形の首は、全国的にみても最も揃った古浄瑠璃の首であるといわれている。中でも説経人形の首6頭、のろま人形の首4頭は特に歴史的価値をもつものである。



人形首^{くび}（のろま人形）

ii) 花笠踊（無形民俗文化財）

花笠踊は神霊を慰め、五穀豊穡を祈願する踊りで、毎年9月15日（現在は、9月15日直前の日曜日）に行われる下久知八幡宮祭礼に神事として奉納されている。佐渡の花笠踊の一典型を示すものであり、伝統的な民俗芸能として貴重である。



花笠踊

④ 記念物

i) 新穂玉作遺跡（史跡）

新穂玉作遺跡は、弥生時代中期中葉～後期に細形の管玉を制作していた集落遺跡で、下新穂と新穂舟下にわたる海拔約10メートルの水田地帯にある「竹の花遺跡（小谷地遺跡）」、「桂林遺跡」、「平田遺跡」、「城の畠遺跡」の総称である。

昭和13（1938）年に発見されて以来、製玉技法が研究され、その後、佐渡国中一帯をはじめとして越前・越後の各地でも弥生時代の玉作遺跡の存在が明らかになった。指定の遺跡は玉作遺跡研究の端緒として、玉作遺跡の多い佐渡の代表的な遺跡である。



新穂玉作遺跡

ii) 熊野神社社叢（天然記念物）

両津地区北小浦の熊野神社周辺に分布している。社叢はタブノキを主体とし、その樹冠の黒々とした森が磯山を覆う様子から、地元では「小浦の黒森」とも呼ばれており、古くから航海の目標として重宝されていた。

本市に点在しているタブのなかでも、この社叢はタブの極相林として特に規模の大きいもので、林内には樹高15メートル、胸高直径2m近いタブの巨木が多数みられる。また、林床にはツバキ・ヤツデ・ヒサカキ・キズタ・ヤブコウジ・カラタチバナ・ムベなどの暖地系植物も多数生育しており、学術上貴重な植生を呈している。



熊野神社社叢

(3) 市指定文化財

佐渡市指定文化財は、市内に 222 件所在している。平成 16 (2004) 年の佐渡市合併に際し、旧市町村が指定した全ての文化財を新たに佐渡市指定としており、内訳は有形文化財 124 件、無形文化財 3 件、有形民俗文化財 21 件、無形民俗文化財 14 件、史跡 20 件、天然記念物 40 件となっている。

① 有形文化財

i) 明治記念堂 (有形文化財)

この堂は、明治 27 (1894) 年～同 28 (1895) 年の日清戦争において、佐渡出身の兵士 40 名余の戦死を悼み、建設されたものである。正面外部の遍額は吉田晩稼、内部 2 面の扁額は勝海舟と東郷元帥の揮毫※によるもので、天井には地球の内部から眺めたような世界地図が描かれている。堂の中央には元帥陸軍大将大山巖の執筆による「忠魂」の 2 字が掲げてあり、本尊として左右に英霊の写真を掲げた祭壇があり、日露戦争・満州事変の英霊たちも合祀されている。また、堂の東には銅柱 1 基が建っており、鋳金家宮田藍堂が製作した「踐度能行」の象箴銘と日清戦争従軍死亡者名、漢学者石塚卓堂の撰文が刻んである。



明治記念堂

② 無形文化財

i) 孤逢遠州流生花 (無形文化財)

延享・文化年間 (174～1810) に創始された江戸の遠州流をそのまま受け継ぎ、羽茂地区で継承されている生花の流派である。

佐渡の孤逢遠州流は、江戸の旭松齋宗有一瀬井より流技を伝授された小木地区小比叡出身の万松齋友一和が、天保年間 (1830～1844) に佐渡に持ち帰ったものと伝えられ、その後一和の門人である鶴松齋重一水とその孫の千松齋宗林一枝によって羽茂本郷を中心に佐渡南部で広められ、明治中期に最盛期を迎えたといわれている。その後、各地区に流派が分立したことで統制を欠いて一時衰退するが、太平洋戦争後、孤逢遠州流に関心をもつ人々によって再興された。現在も、保持団体である孤逢遠州流生花保存会によって、継承されている。



孤逢遠州流生花

③ 民俗文化財

i) 山居大数珠 (有形民俗文化財)

この大数珠は、念仏を唱えるときに大勢で繰りながら駆け廻る百万遍念仏で使用されるもので、現在佐渡ではこの真更川だけで行われている。

直径約 15cm の大珠が 2 個と、中珠が 1 個、小珠 977 個でできている。伝統的な念仏行事の道具として貴重である。



山居大数珠

ii) 琴浦精霊船行事 (無形民俗文化財)

小木地区琴浦で行われる盆行事である。

8月13日に彼岸から祖霊を迎える御船である「あのひのごんせん」を浜で竹と稲わら(昔は麦わら)で作り、火を点けたのち、子供たちが泳いで沖まで運んで放して祖霊を迎える。子供たちは沖から浜に向かって泳いで帰り、「あの日の子たち」として村の人々に迎えらる。また、8月16日には此岸(現実世界)から祖霊を送って行く御船である「このひのごんせん」を作り、各戸から持ち寄った精霊棚の供物を積み込んで火を点けたものを、子供たちが泳いで沖まで送るのである。



琴浦精霊船行事

④ 記念物

i) 黒木御所跡 (史跡)

承久3(1221)年に佐渡へ配流された順徳上皇が、崩御までの22年間を過ごしたとされる。

現在の黒木御所跡の四圍は明治28(1895)年に整備されたもので、同43(1910)年には竹柵を石垣にし、外廊に木柵を廻らせた。また、大正5(1916)年には当時の皇太子殿下(後の昭和天皇)が行啓^{ぎょうけい}され、松を御手植えされている。



黒木御所跡

ii) 北岳のブナ林（天然記念物）

このブナ林は、大佐渡山地の金北山の西方約4km、通称「北岳」の海拔1,000m付近に分布している。ブナは温帯上部の落葉広葉樹林の代表的な樹木であるが、佐渡では大佐渡山系の海拔約600m以上の山地の所々にわずかに残るのみである。また、このブナ林は佐渡の天然林としては最も規模が大きく、大佐渡山地の原植生を伝える林として重要である。



北岳のブナ林

（4）特産品、工芸品、菓子・料理等

① 佐渡米

島の中央に広がる国中平野を中心として、山裾の中山間地や海岸地域などで、佐渡特有の温暖な気候と清らかな水、ミネラルを含んだ潮風など大自然の恵まれた環境のもとで栽培される佐渡米は、新潟県では魚沼産米と並ぶトップブランドとして知られている。中でも、平成20（2008）年からスタートした「朱鷺と暮らす郷づくり認証米制度」にそった栽培方法により、農薬や化学肥料を通常の



佐渡米（米・コシヒカリ）

半分以下に抑えることや、田んぼの小さな生き物たちを育む農法であることなど、厳しい基準をクリアしたブランド米「朱鷺と暮らす郷」として本市の認証米となっている。

② シイタケ

原木栽培でじっくり育てられた佐渡の生シイタケは、肉厚で香りが際立ち、しかも食物繊維が豊富で低カロリーでもあるとして、県内トップの品質を誇っている。



シイタケ

③ おけさ柿

佐渡では、渋柿の「^{ひらたねなし}平核無」と「^{とねわせ}刀根早生」の2品種が栽培されており、佐渡を代表する特産品である。種がないので食べやすく、とろけるような舌触りが特徴で、ビタミンCをたっぷり含んでいる。渋抜きをした(さわした)“さわし柿”のほか、干し柿、柿酒や柿ワイン、シャーベットなどにも加工され、様々な形で食されている。



おけさ柿 (柿)

④ 佐渡牛

佐渡は子牛の産地としても有名で、多くの佐渡牛は競りによって有名ブランド産地へ出荷され、そこで成牛へと育つ。佐渡で育った成牛が佐渡牛となるが、数が少なく非常に貴重である。



佐渡牛

⑤ 南蛮エビ

甘エビとも呼ばれているが、新潟ではその鮮やかな赤色と形が赤唐辛子(南蛮)に似ていることから、「南蛮エビ」と呼ばれ親しまれている。とろりとした口当たりと甘さが際立ち、刺身や鮓ネタとして人気がある。



南蛮エビ

⑥ ズワイガニ

カニは冬の日本海を代表する味覚で、佐渡沖では紅ズワイガニ、ズワイガニ、毛ガニが獲れる。中でも佐渡沖で水揚げされたズワイガニを海洋深層水で短期蓄養した活ズワイガニは、身が締まって甘みが増すと評判である。



ズワイガニ

⑦ イカ

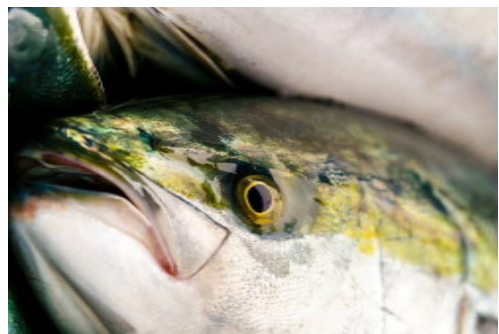
スルメイカ、スミイカ、ヤリイカなどは年間を通して獲ることができる。刺身はもちろん、うまみをギュッと濃縮した一夜干しも佐渡土産として有名である。



イカ

⑧ ブリ

夏のあいだに北海道沖まで回遊したブリは、水温が下がってくると産卵のために南下しはじめる。佐渡の両津湾の定置網で最も早く水揚げされ、10 kg以上の大ブリのなかから漁師の目利きで厳選されたブリが船の上で血抜きされ、海洋深層水の氷で急速冷却したものが「佐渡一番寒ブリ」として出荷されている。



ブリ

⑨ カキ

冬が旬のマガキは真野湾や加茂湖で育てられ、やや小ぶりながら味の良さには定評があり、カキ鍋やカキフライなどの料理で楽しめる。夏が旬の岩ガキも絶品である。



カキ

⑩ 地酒

佐渡には5つの蔵元があり、それぞれ個性を活かした酒造りが行われている。佐渡の豊かな自然が育んだおいしい米と清らかな水から生まれる日本酒は淡麗辛口のスッキリした味が特徴である。



地酒（日本酒）

⑪ いごねり

海藻のえご草をところてんのように煮詰めて固め、そばのように刻んでネギやワサビなどの薬味をつけ醤油をかけて食べる。さっぱりとした磯の香りが楽しめる佐渡の代表的な郷土料理である。



いごねり

※注釈

- | | |
|------------------|----------------------|
| 山師 | …鉱石の採掘事業を行う人、鉱山業者。 |
| 陣屋 | …代官の住居及び役所が置かれた建物。 |
| タガネ | …金属や岩石を加工するための工具の一種。 |
| ばんしょらべしよ
蕃書調所 | …江戸幕府直轄の洋学研究教育機関。 |
| きごう
揮毫 | …筆で文字や絵をかくこと。 |
| ぎょうけい
行啓 | …皇太子などが外出すること。 |